

外国出生患者の治療成績における「転出」について

この度、公益財団法人結核予防会結核研究所 臨床疫学部河津里沙主任らは、治療成績が「転出」と評価された外国出生結核患者について調査し、2011年～2015年に新登録となった外国生まれ結核患者で治療成績が「転出」だった668人中、51.3%は国外転出していたことなどを報告しました。

本研究は2018年12月7日に国際学術誌“BMC Public Health”にオンライン掲載されました。以下に論文の概要を簡単に記載しますが、図表も含めて情報をご利用の際は出典を次の通り明記してください：

Kawatsu L, Uchimura K, Ohkado A, Izumi K (2018) Evaluation of “international transfer-out” among foreign-born pulmonary tuberculosis patients in Japan – what are the implications for a cross-border patient referral system? BMC Public Health. 2018;18:1355. <https://doi.org/10.1186/s12889-018-6273-0>

目的と方法：結核の治療途中で国境を越えて移動する人々に対する、継続的な支援は世界的な課題である。しかし多くの国では、治療途中で国外に転出した結核患者の治療成績は「転出」若しくは「追跡不可能」として評価され、最終的な転帰はわかっていない。本邦でも外国出生患者数は増加傾向にある。治療成績における「転出」の割合は日本生まれと比較すると外国生まれ患者で高いが、転出した者のうちどの程度が国外転出なのかは把握されていなかった。本研究は本邦における外国出生患者のうち、治療途中で国外転出する者の状況の把握と国外転出のリスク要因を探ることを目的とし、2011年1月～2015年12月に新登録となった外国出生結核患者のコホートデータを分析した。

結果：2011年1月～2015年12月に新登録となった外国出生患者4,179人中、治療成績が「転出」だった者は668人であった。668人中、325人は国内転出、343人は国外転出しており、後者の割合は増加傾向にあった（2011年23.3%→2015年57.7%）。治療を成功（治癒＋完了）した患者と比較して、国外転出した患者における男性、及び0-24歳の割合が高く、また入国から診断までの期間が2年以内の者の割合が高かった。多項ロジスティック解析の結果、国外転出のリスク要因として、学生と比較して常用勤労者（リスク比[RR] 2.86、95%信頼区間[CI] 2.04, 3.99）、入国から診断までの期間が2年以内（RR 8.78, 95% CI 4.30, 17.90）と3-5年以内（RR 7.53, 95% CI 3.61, 15.68）、喀痰塗抹陽性（RR 1.95, 95% CI 1.53, 2.48）、及びインドネシア出生（RR 1.86, 95% CI 1.13, 3.03）などが特定された。ま

2018年12月28日

た国外転出した343人中、治療期間に関する情報があった142人について更に分析を行った結果、33.1%は初期強化期に本邦での治療を中断し、国外転出していたことが示唆された。

結論：本邦で治療を開始するも、治療途中で国外転出する外国出生患者が増えていた。入国から結核の診断までの期間が短い患者や喀痰塗抹陽性患者ほど国外転出する傾向にあり、文化や言葉の壁や、入院治療への不安から日本で治療を継続することを断念している可能性が示唆された。本邦で安心して治療を受けられる支援体制を強化すると同時に、転出を決意した患者に対しても、転出先で治療が続けられるよう、国際医療連携制度を構築する必要がある。

【本資料及び論文に関するお問い合わせ先】

公益財団法人結核予防会結核研究所 臨床疫学部

河津里沙

Tel: 042-493-5711

Fax: 042-493-5529

Email: kawatsu@jata.or.jp